

研究テーマ：新生庄原市におけるコミュニティの自立（ビジネスを背景とした生活基盤の確立）に関する研究（地域課題研究）	
研究代表者（職氏名）：准教授 村田和賀代	連絡先 (E-mail等)：murataw@pu-hiroshima.ac.jp
共同研究者（職氏名）：准教授 前川俊清，助教 上水流久彦	

## 研究の目的

庄原市も含め、現在、中山間地域が直面している問題は、生活基盤が損なわれ、集落自体が崩壊しつつあることである。そのような問題に対して行政的には自治組織の再編、機能の見直しを検討しているが、それだけでは不十分であることは否めない。また、様々な組織がボランティアによって地域活性化を行っているが、ボランティア本人ならびに地域の人々において「イベント疲れ」があるのも事実であり、持続的な地域活性化が難しくなっている。

現在求められていることは、人々の参画を持続的に支える方策であり、そのひとつとしてビジネス型の活性化が求められている。ビジネス型とは大きな産業を興すことではなく、活動に対して少額であっても相応の経済的見返りが行われるものである。

本研究においては、課題提案書に基づいて次の二点を研究の目的と設定した。

- (1) 地域に密着した産業や生活面での交通網整備、商店の維持に向けて、域内循環サービスシステム等の構築のために具体的な解決方法を提示すること。

中山間地域においては、地域の商店の閉鎖や不便な交通システムのため、自家用車を持たない高齢者や児童、または彼らを扶養する者が不便な生活を強いられている。これまでの研究からオンデマンド交通など提案がされているが、庄原市の実態や地域住民のニーズを調査したうえでの検討はなされていない。庄原の実態を踏まえての提案が求められている。

- (2) 中山間地域において未利用資源となっているドングリを用いた放牧養豚の確立と生産システムを提示すること。

庄原は豊富な森林資源を抱える地域であるが、エネルギー革命と材価の低迷により、森林資源が利用されなくなっている。かつては里山として利用されていたクヌギやコナラの林は、今日ではほとんど管理されなくなっているが、これを利用した養豚を行うことを提案している。再び人が入るだけでなく、小規模ビジネスを通じて庄原の地域イメージでもある里山を整備することが期待されている。

## 研究成果の概要（2年計画の1年目）

(1) 生活交通と移動販売に関しては、地域の先行事例と庄原市の状況を比較検討し、次年度以降の実現に向けての問題整理を行った。生活交通と移動販売の問題は、特に交通弱者となる高齢者と子供、子育て世代の女性には喫緊の課題となっている。

具体的な実施に結びつけるかを探ることを平成19年度の目標としていた。生活交通と移動販売については、先行事例の地域で聞き取り調査を行い、中山間地域における交通と消費活動に対する支援の必要性と、実現可能性があることを確認した。

(2) 養豚については、実際に4ヶ月間の放牧を行ったことで、起こりうる問題点を整理することができた。豚の飼養については、水の問題と鳥害が解決すべき課題として残された。また、精肉のブランド化に向けて飼育手順のルール化が必要であることが明らかとなった。

当初考えられた課題であるどんぐり収集は報道や公報からの呼びかけにより、今年度分は十分な量を集められた。また、実際にどんぐりを集める際の問題点も明確になり、20年度に行う地域住民の参加によるどんぐりの収集システムづくりで解決を図る。

## 今後の課題

平成19年度で明らかになった問題点は、人同士をつなげる組織の必要性に繋がっていると考えられるため、平成20年度では人の連携の問題を重要課題として取り組む計画とする。

- ・ 地域交通では、実際の担い手となる交通事業者とも協議を行い、実現可能性をさぐる。移動販売については、小売業者との連携を図る。
- ・ 養豚については、新たな放牧養豚の参加者を募り、地域全体での飼養頭数を増やすこととする。給与するどんぐりの種類を変えることで、豚肉にどのような影響があるかを分析する。また、どんぐり集めのための中核システムとしての集落機能の活用を図る。
- ・ 新たな地域産業として、地域特産の豚肉を核とした小規模ビジネスの芽生えを探る。

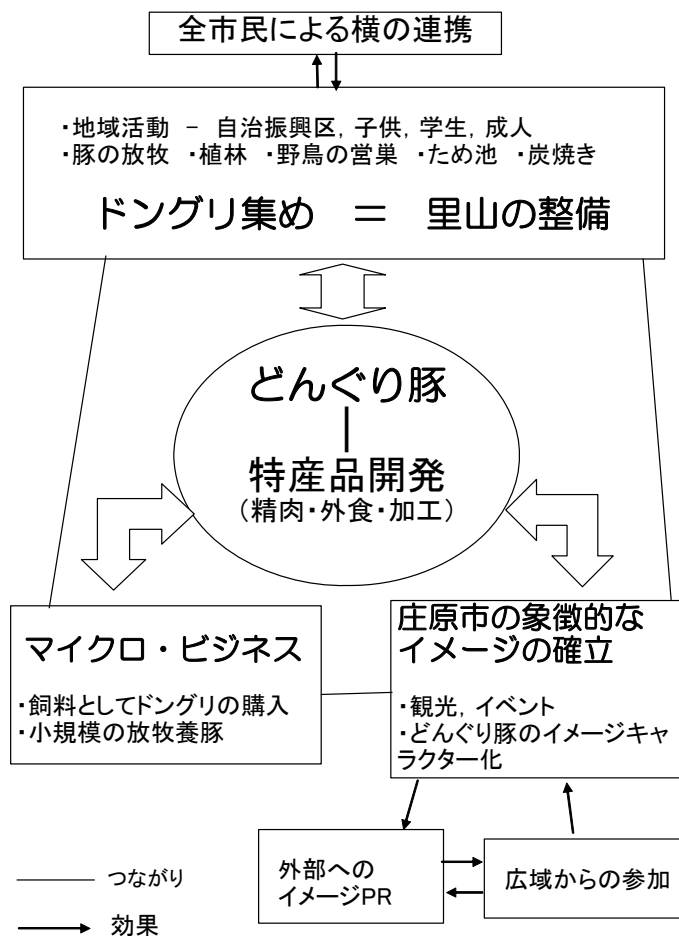


図 放牧養豚（どんぐり豚）を核とした地域内の産業イメージ